



奉納

正一位柿本大明神祠前

時一千九百零九年祭



右見州高角山祭

仰柿館烏仙選



高角山



おと一安永二年二月十日石見縣や高角山一
鎮聖師より棟本大の神子にやまにあつても終るを
さしめて國一う海に出く凡牒の道は筆談より傳へる
和音を文あり連歌統譜の道に於て筆談をなす
は佛神談傳を著しけるを河内しに交ふその御社ある
海に位傳り大崎氏為仙の道しをくとも織譜の凡牒を
多しれ傳りく多き大巻は社ありゆくとをいふ
六の巻は氣流山を雲のどよりくお流のつらう海く

法系の詞はさしほひゆくりはまのまありて多
中にさるあやしき都より織譜は費よりく奉納し
またん事ともあつしはれとくし思ひ傳りしあり
此傳社一筆拂といふ是樹あり其の振り此傳社の
りしまた教筆はうも一しとくはれいふまじ
其の木は空にさる河くく世神傳に生るる飛鳥の
来といへもその神は空傳りし生出傳りやとすも悪なる
此傳のんくさるはれとくし小松や海流しも傳り

大正筆材の巻く紙の綴りの題もろくくと筆材の
 題もろく法果の巻く紙の綴りの巻紙名もろく筆材集と
 名付侍らうや世に席と予小書人筆材の巻く紙
 通学者の巻くもの巻く巻たつてはしるべき
 御筆は法果の巻く紙の綴りの巻紙の巻加
 かなしく通紙の巻く紙の綴りの巻紙の巻加
 紙と目録の綴りて都に東山園の巻紙の巻加

徳友徳也

春日思筆材

高角

筆材や筆材とろく巻紙の巻加

仰柿館
烏仙

いとくはうの巻紙の巻加

蛙丈

巻紙の巻く紙の巻紙の巻加

梅四

巻紙の巻く紙の巻紙の巻加

休十

巻紙の巻く紙の巻紙の巻加

素石

巻紙の巻く紙の巻紙の巻加

滴子

晴やうれ月暮るあまろ小便伝

三松城

麦雨

中又おろ小裕百ささる

北浜

去ほかに猫のひきあそびあや

梧井

昔清もさうな法乾朱乾

双芦

熱く布袋初高とおうり

善風

後笑きれとやうく春時

森後

桑味の能死、折りてあそ

紫石

これうさゆり魚おあま籠

蘭子

二三又帝お流し綴り有

一瓢

牛うも牛うり池お房とそ

李山

清志おひまほすれぬ糸の巻とそ

萬園

ゆふりり〜縁お吃ぶ

冠二

ほおお夏お隣り掛あそへ

妹山下

林水

人あーらぬも才叢か家

白里

了便り〜侍うまそあそ伏のあそ

川巴

雪おあそりり〜芭のあそり

海草

持つて何より務の釘成りおき候

己業

くねりしと及ぶ幾の親

女 玉備

忍みしとて筆と筆とおきし遠い

冠子

何時しや厚く鏡の写り

紫衣

此おき養目しおとくきしと

珠丸

のくねりしと及ぶ幾の親

杉士

欠りおき候も月お常り候と

丈巻

二百十日の市乃とく先支

里風

病の案の東より傍屋にきり

高角 傍 蕉雨

此案をくき醫者よ及ぬ

松巴

見よとては丹波の山より京お山

蛙川

只きりしと及ぶ幾の親

車乙

子重何より己十巻流のそにあひ

千巻

くねりしと及ぶ幾の親

女 志代

秋日見筆柿

益田

三條井
梨股

筆柿や作けも露もあつても

之をくさるもむのありし

常きもあれと新酒は汲く

吾はあつて海への移徒

よあち多んとし羽のつる

何れよきふら娘くうり

何人

百丈

免心

風茂

山如

物とくさ義理し引きぬ

美事あつてもあつても

棧の木曾海をちやよ夕馬

このき書つとつと事

伽り伽り先くむの下中

すゝと見晴る海のうら

ふ海へさくはるも根と

悪病をえより建つと

書螺

本一

兔舟

角

梨毒

女二

御舟

菜圃

あつたはふと帯とほつちり

急乙

多しりの夜に位母のそ侍

浦夕

頭つて内を家子あしそ育そ

掩耳

ほい 飛んそはつちそ

秋休

まのまると柱をれまそ存も今

梨才

すへ 出ん揺りそ何と杜の鳥乃

李丈

痛入子暮のあそ秘んそうさ

春木

出の雨あ日よ只そあそれぬ

吹瓶

あつちりー せんと非と花あろ

糸推

あつちり 紙紙よ ちりる鴨

素人

お

神法樂

題筆柿

筆柿の雪や春の鳥の音

英徳
山崎坊

笔柿や謂れつゝく秋の暮

朴島

ゆきうらねや春冬古筆小筆多し

斗函

筆柿や書きたり乾くぬ久し

冬盤取

筆柿の雪葉とほくそふく

素鳩

雪うらや筆柿さきく我柿一今也

却麦

筆柿や何とほりし先芽おし

文川

筆柿の雪葉とほくそふく

文水

ゆき筆柿やみりし先て柿前ん

相与坊

万葉の云筆柿哉 世に傳ふ柿ん

東武
玄武坊

筆柿の雪葉とほくそふく

柿しゆき筆柿品や柿柿たる

園之

ゆきうらねや筆柿とほくそふく

鳥籠

筆小何し指す柿の書

祇尹

柿の若も葉一いつくも柿の庭 乙亥

柿垣や柿もあつて柿の庭 巴辰

葉の若や柿の葉へ一いつくも葉 良和

柿くうもあつて柿の中よ柿 耕五

柿も柿や柿もあつて柿の林 花彦

神垣も柿や柿もあつて柿の葉 梅芽

葉も柿や柿もあつて柿の一通り 梅石

柿ももに柿もあつて柿のうらゝも 二月坊

葉も柿や柿の葉もあつて柿の葉も 不止

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 巴嬰

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 聴石

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 松令

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 松舟

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 冬李

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 長英

柿も柿や柿もあつて柿の葉も 東巴

筆柿や赤き葉の種乃絶もきん 相雨

筆柿紅多子や赤らゝ 砚渾く 洛陽 條夏

ゆゑ柿や出そきいぬ 柿の佳 一挂

苔むらや筆紅るん 柿紅心 凡乙

筆柿やその 乾ひ 炭 熟き時 炭雲

婦さくしにや 露もよふ 筆に金録 栲治

筆うさ 紅赤毛ふく 紅 穂穂く 紅 懐幸

鳥五 渾く 漆く 筆の 柿紅葉 楚尾

筆柿や自らとほく 初紅葉 丹後 東陌

ゆゑ柿や木紅葉の 紅く 紅くとも 加賀 季友

筆柿 一うゑく 様の 心り 耶 周防 北海坊

みゑう 紅や 野の色も 木の方より 益田 壺外

英しや 葉毎一 柿の 葉も 益田 百丈

筆柿や 出あゝりうゑ 旁の 隈 竹雅

筆うさや 是うゑ 秋の色 風茂

ゆゑ柿の 葉紅く 紅く 紅の色 素人

筆楸の是もつるる厚の女 梨童

筆柿や露の惹り大老道と 掩耳

笔栲やいとし儼く秋子小 喜螺

下まも際々如栲子筆つひく 山虹

ぬそよきや執事存と急の芳く記 舎一

笔栲やそも栲き女栲子色 秋律

筆栲の儼るる急此まきくハハ 共二

あき栲子その墨色く急有女 免流

ぬそ栲の京あり三十一文字も 何人

実よきく栲と自然の毫取く 梨子

筆栲や栲りへく急も只まき 可角

筆栲やその女ぬ人きんあまき 湖舟

笔栲や祝老法と船の河より 免乙

きく栲やぬりその葉もあまき 葉園

色つううへはる如葉の栲子色 李丈

筆栲やゆきく色もき京 浦父

ゆき柿や葉秋よその筆心 芸

筆柄のよもりし條名や形も山毛 吹瓢

おまかまの誠能味や自と意 先舟

裏表うふ筆柿や氷あふ 日貫 馬蹟

筆柿や馬と退いそまら 琴五

照りぬる梢し筆能熟柿丸 桂舟

筆柄や宗し芽さうて月と露 志計

ふく柿やも味そまこ知りも 文狂

筆の起や葉も句柿し枝醒し 女 府涼

柿能ぬる文有るも筆後く 竹人

筆柿や葉も波是しそ英し 妹山下 丈危

多しきや柿と不易の筆取し 公望

筆柿やも念能葉能末唐ふ 川巴

ゆきかまらる見能圓の名も言ふ 海声

あまう起やも筆柿能葉乃流 己葉

念能葉能條もんや筆の柿能葉 冠心

筆柿やこぼれしに於ては

女

玉葉

筆柿を拾ふそ多見通和帝

少年

雲石

ゆき柿や月水へふはと筆柿

珠丸

筆柿や味いそ書そされ

杉士

ふて柿や程と和克の道彦

里翁

とゆきしそに和柿や筆の形

林水

筆柿や子裁り名の冠葉

三松城

萬玉

ゆき柿や月水にふはと筆柿

芦風

おとまりやけふ筆柿とふは

一瓢

筆柿や高成硯の海彦

真後

筆柿や筆そ多見通和帝

招井

ゆき柿のそ多見通和帝

硯芦

ふて柿や木の筆柿とふは

蘭子

筆柿やそ多見通和帝

世綿

ゆき柿や月水へふはと筆柿

冠二

筆柿やそ多見通和帝

少年

辨

筆柿やあけを控もつしり
 筆柿や海北ハ文字もあけし
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ
 柿の若きも葉は深長や筆みぬ

萬葉と筆一侍少や柿りこと
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ
 筆柿や若きも葉は深長や筆みぬ

紫石

杉

粟

素明

富春

曾根

兔末

畑邑

花明

素石

偏子

休中

性川

松

松

こころ無うゝ急とほりや筆の柄りふ
 筆柄や多りうゝと高も無りま
 筆一や柄もあゝ此の筆子流
 物多柄や筆筆子も山もいゝも
 井垣や筆の流さふ柄もあ
 筆柄やあゝ筆は月と木のまゝ
 末子思うゝ海と尺巻うゝ筆の柄
 筆柄やあゝも冥加の條さうゝ

車也
 数風
 志静
 鴨南
 可虫
 枕波
 女 共代
 傍 蕉雨
 イ魁

筆柄や露と志川うゝゆゑ
 ゆゑ柄やいく林も出巻とゆゑ
 筆柄やあゝ筆一と高子玉まゝ

傍 佳丈
 可敬
 イ魁

題石見写観

妹山下

炭元

筆子思うゝ急とほり
 硯一と風巻まゝり筆子流
 名のゝ〜河と石見写さ
 筆と高筆子流 待りま

此首再拜

諸國名録發句

美濃

曉者 鐘きくゆきく、きふ能存
うき能存中き心指きふききき
向能存きききききききききき
笑うきききききききききき
ゆききききききききききき

小方

乙筑坊

尾形

水越坊

大垣

冬怒坊

長屋

李有

岐阜

素坊

尾張

木一りきききききききききき
ゆききききききききききき
六のりきききききききききき
水ききききききききききき

名古屋

也有

吹上

八電

佐屋

吟山

伊勢

洞津

二日坊

ききききききききききき
親も子もききききききききき

夏笠

ほくそまの如きまきり柳

外宮

水鏡

鶏ノ一物もろく屋根の瓢り那

内宮

九作

十六夜や世うりときらぬ心

桑名

麦士

おちきり松の枝折んふ此月

上野

何鳥

伴頌

飯越焼うくくときく板をぬきり

上野

桐也

青くとききりつきや若狭水

素梅

志摩

そ川きや平つふろり一際やに

多解

魁青

参河

更衣あちち向ふは足遠や

玉府

米林

遠江

万果や己々門うりきり出ふ

濱松

智丸

駿河

木幡くもはやひくくん星あちへ

府中

梧泉

陽冬農被の舞くや若菜つと

吉原

巴雪

相模

あけりや名残さしきく身成友

大後

百明

伊豆

初あきい扇の陰月と嘆きり

三崙

如安

武蔵

手うけりてあはれさるや神はれ

江戸

玄武坊

幾きく、岩うつろく清水くは

風切

秋きいー紅き水ー家高ふり

推有

中ノ親やきあふのふき矯けり

鳥明

あしき海ノ案のうきあはれさる

宗瑞

我ものー手打ハ休ー女市正

蓼太

鳴巢

都儿

小魚まきく折り水口糸う那

上総

東金

五林

うんこ名信を却と出さるきり

下総

総子

長弘

乃ちねうちー瘦るの束や切らる

下野

ひ水巻るくくくくくくくく

沼田

春路

上野

寝と牛乳角くくくくくくく

外橋

春路

流くくくくくくくくくく

高崎

雨竹

常陸

山出くくくくくくくくく

水戸

三日坊

陸奥

今冬及ぬ人みまぬくくく

付野

望桂

妻うやまぬふのふくくく

南郡

文二

そけきややぬくくくくく

仙臺

素卿

ほくくくと来はくくくく

仙臺

知昂

うくくくくくくくくく

金井

麦雨

木くくくくくくくくく

金井

巨石

山形

柳くくくくくくくくく

尾花

将中

名もやあふれ秋一葉を命

山崎 秋後

怪子一弱葉の清くやけきの秋

米沢 涼花

佐渡

姉のや松子歌きぬさあふれ

相川 松中

城後

鷗老一浜へ去る一これの

糸魚川 竹意

橋つるや何々花う花水衣き

高田 葵く

さふ一此の味れふあり春のあ

長岡 後日坊

城中

桂子実の中ハ冷やう秋のこれ

富山 星花

加賀

事此の事一三つあもあは地味れ

松江 水代尼

聖子あ君一此の顔や鏡月

金沢 巨井

彩彩あ屋根へとやああ一これ

後川

能登

岸つるあまの事一和布より

金沢 見栴

紙衣

十一

吃方多矣一善一鳩形哉

福井

如く

小舟舟の馬の雪のり雲のそれ

敦賀

琴臨

沢山一善如音とて福葉よ

金体

二遊

うらぬれや藪一葉の鳴るまね

大野

里夕

飛弾

路くも教人少そ多き法水くれ

高山

芳斗

出はましくまきくきむね一これぞ

休安

伝灌

萱原一渡くまきりおれへ

上田

如毛

祓く起る春のおくくお存り力

松本

素因

甲斐

物一ちう記れとまきりあつもえ

長沢

如岱

近江

一と歌や朝き月夜倉片草

栗津

胡熊

子乙女や涙一とまきり美の裏

大谷

巨州

十一

下野や日一 蕪水なる水 龍色
大川や教の中 野の軍のうけ
龍川
野水

山城

新井馬和をく 少と風の斗と若
法陽
蝶菱

春而や二夜と 海り一六田の若
附尾

冬うと龍の外 見ゆ龍赤く
三敵

辨天の小 遠く一うとつと
暁源
市厚

梅、馬やと 舞う風も 出うと
鞍馬
直石

横津

冬籠り川に 石落 鹿を 冬
浪花
霜國

苗代や 田螺と 水一うと
寸馬

和泉

人々を 冬屋、水 鹿 赤く
堺
吳一

嶺岐

振袖一 番も 水あり 冬菜
銀音
帯河

庵下 冬 何と 一うと 鹿 生 海 鹿
九魚
己崎

古佐

蒲葦の葉は猶も葉のうら小春の光

子羽

足跡をまゝ人の形に似せしむ

中村 乙用

伊豫

山崎の川雉子の鳴く聲は白鳥

松山 喜抱

若月や定さりや夕日 影

五原

播磨

河豚汁 此を百相のうらり

子研 布舟

了痛き 針のやうなり 冬 子雲

加吉川 嶺南

葉が戸やぶる 舟のまゝ 光る葉

林田 山峯坊

陽暮し 古 舟のひしや 車 ち

善山

備前

春のやとふ 舟の友と又ち

岡山 松吾

舟のうさや 舟のうさや 一 二寸

孤葉

備中

夏 舟の織 舟の織の被り

笠 二軒

むくしと市街埃や電光石火
蘇うも海く出れ希くれ

備後

一帯とくはくぬもくく鳴き雀
李岱

水能音なきをきくうんこ鳥
田房 古亭

安藝

く川空や海去るもたに女あふ
風律

くく鳥交の人成及た出く神きぐ
性牛

周防

く川空や海去るもたに女あふ
壺外

くく鳥交の人成及た出く神きぐ
素文

詠ふ系 目もさふあく雪淡く
一系

海のく物も蘇能申くり妻能系
如舟

拂ふおの空を神もく果摘
女 左琴

現又まは山次くくふはく
吉田 可公

飛く鳥水く流てもふくく揚舟
井声

重くし藤の葉をくさす子々夕ひをり

傍 在露

重くし藤の葉をくさす子々夕ひをり

宮 礎洞

ちとそとくゆり冬枯くも柳の如

可北

神を如日くく眼をくさすくく

巴山

筑前

いもくし利けと飽まぬ燕う乳

傍多 披雲

林も今沖うきまや帆うけ舟

福因 己鯨

空を如や海りくく春流る如

福因 鳩水

ふくしと赤きも赤く唐の

波路

うんと鳥ちうりうり信る唐の那

梅珠

妻の如能くし青くくくく文を

春吉 斗本

筑後

姑のうくし手り空や大根引

去井 泥牛

肥前

船うけくしくく日休を大工う乳

佐賀 岩塚

美奈もくくくくくくくくくく

海石

苗一ろ子一房一喜む子界うれ

五仙

庵丁にもくく多由まぬ生海氣分

長安 松山

度河にまきく是由氣を結う那

披雲

多うれくりや草薺の貴子

大村 柳葉

肥後

川林哉幸一つれうれく種瓢

熊本 雪戸

留之の戸もぬく世縁寺やんこ多

其麻

う能ふや子苗の如く一咲つ、け

宇古 八菊

山ゆまや岸うはる水う、又
撰子や流々一捨く谷能ふ

素木

不溢

日向

水善如きはくは和やう川為

壺面

薩摩

若月やゆぬ鳥衣高きう

俤松

藪力や在所の妻も咲く形

柳水

豊前

うけはくや河系表の洗り也
物能美の喜うきくおきぐ
小倉 此控
暖光

丹後

秋ももやあ能居く川縁う那
明うは露りももむや蒸のあ
ふりや根ももり能くあ能
黍能美り能の言もやう水の秋
水節の町へけくは着蒲う水
日田 筆馬
府内 栗瓜坊
梓築 遠之
梅園

ひ春や何んの中をるんれも
素里

但馬

多向の能成能くはるう言清水
わむむ江や帯も裾をつもる
うも能んや無もくはる能自能
折く河もや京もくはる水のと清
木卯 木卯
生部 生部
袴仙 袴仙
涼美 涼美

丹後

涼や鶴のゆきと出と流も背
宮崎 天

多葉粉ふりきりつる如き葉
垣あつ川二日一越ぬうらみ
う川雪やもろしとあま小石系
石見
岩壁 百尾
漆 芝月
清雪

らつーふうもきあかいつ猫の巻
買ふもやぶ葉の葉よ沖一これ
きやあししと教きん
子供らと抱お半ききふさかり
大田 芝川
日永 健鼓
濱田 瓢十
益田 梨股

人き留まとおもひくさく冬あり
まふ持ふのまふくは林のてふ
おきあきくまうおあおあき
りの親此橋ももあき 蕎麦の系
らつーまの畑端もあきあき
掃きまきく史と見てあきあき
沖一これ中ふ海もあきあき
卯のまきあきあき八真も里もあき
至丈 什雅 風袋 素人 梨老 掩身 青螺 山及

巾子白も川を流れぬ燕う乳
 七葉や社うらむる如く言ひ色
 黄きや昔のうらむる如く言ひ色
 宵うらむる如く言ひ色
 夢外ぬ是とや思ふく言ひ色
 喜あともく静し涙を去る如く
 名月や只清く川船もあり
 うらむるの抗よ名付く言ひ色

女 糸流
 信 半秋
 休二
 秋伴
 舎一
 里夕
 夕英

水子有下くなく蛙
 空に雲馬さ波をく言ひ色
 水子有下くなく蛙
 一日も昔れく言ひ色
 日新も言ひ色
 川の日新も言ひ色
 涼しく言ひ色
 せの中言ひ色

何人
 鬼角
 丈尾
 尔里
 里野
 林水
 又菊

公もや何處のおまりうともしこと
 海月流の水にそくすく赤くぬ
 山がたや嫌しうきふふの色
 今白ううそまもうみはく神を
 数く加う山の神く様う都
 房葉やまつとと流くわう川ら
 水仙やう川咲くうもきあ中
 月れちううふとあゆも秋のうれ
 湖月 川巴 冠里 叔士 紫紅 玉備 海月

木下雲や目とまもくく選選はあ
 流しあまゆる水やう都うも
 侍もくう程き牡丹のう漆ぬれ
 候うあまもくうせりく神さう
 を付能命も凄くきこのうれ
 是きこの秋と流くう熱柿うぬ
 勢はきううぬ日とあり流鼓を
 せんく葉も雲の葉やう山
 布白 琴弦 ト之 芦舟 古入 芳伴 丸人 月洲 合武 山

露もさやろし志もさむ新巻
 舟もさやろし志もさむ新巻
 遠く志や昔の夢を記せり
 一二偏水より新巻もかきつ
 新巻より昔の夢を記せり
 編笠より旅人かきつ
 折る女より峠より控ぬ玉合のふ
 一巻より新巻もかきつ

舟
 湖邑
 富春
 一瓢
 喜後
 芦風
 世路
 紫石

起樹より新巻もかきつ
 夢もさやろし志もさむ新巻
 二二本より新巻もかきつ
 妻はくや二三人より新巻
 一葉入机より新巻もかきつ
 鐘もさやろし志もさむ新巻
 蝶拂や風呂の湯より新巻
 何より新巻もかきつ

硯
 梧井
 右柳
 冠二
 麥雨
 萬國
 葉子
 人瑟

風鈴のしるしを聞くは秋の林

菅原

秋の風を友とて語りし

千足

ゆふの風をよみしは秋の川

季冠

里を歩む夕日影あるに藤の影

秋三

あつきよき秋の柳も吹れし

汝上

しるしを聞くは秋の川

指月

玉垣を朱や赤く染めし

巳三

高き山を登りては秋の石

嵐立

深うけの淵を渡るは秋の月

古人
芦洲

昔を歩むは秋の川

全
芦角

夕の風を吹かすは秋の川

全
羨鳥

おとれたるも二日とては秋の川

日貫
休人

吹けとちり散るは秋の川

桂舟

り角はあつは秋の川

鳥隣

名もや聞えずは秋の川

女
扇涼

さうらとて秋の川

女
狂

若少形も先子見や結まぬ

志計

出代や二三日曲実の新

琴乙

小娘の根留もかゝる子恋

栞田
才免

昔やまふ日我実成をむく時ふ

俗
童山

なう起日や拙乃木恋も新形

女
柳子

此頃春下りもくもく牡丹のふ

喜代

隻瘦の度ふゆくや唇子あ

嵐矢

高し海に訓後まよもの二日月

青里

何れもお形もくもく帯

古角
蛙丈

表乃冬畑のわたりや暮麦のふ

梅四

若月や小舟もくもく流

綴
素石

笠帯も隙井もくもく神れ

伏十

指さすも笑ふもくもく二ッ軍

満子

夕暮や下葉もくもく流る歌

松巴

吾う月や曇りもくもく咲

蛙川

破水垣もくもくくもく月歌

末乙

一乃廣元少子仲郭公

映南

二月而如著之業氣の後一子

志靜

眠りては雄子争へ別きる

鼓風

とて下へありと給也若く目と

の中

ふ而や終もそにきりなり

松波

長束は誘ひ出さくや麻の如

信 蕉雨

山とありと終成法先く叶ふが

鳥仙

洛陽春林橋屋治兵衛坂行

篤友軒



